

学習者の特性を活かすデジタル学習材の開発【4】

～教育用メディア端末と電子黒板を活用した授業実践と評価～

A general study about media terminal for education to make use
of the characteristic of the learner in

水端めぐみ／久世均*¹／齋藤陽子*²

新学習指導要領の総合的な学習の時間の目標に「横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、…」とある。また、指導計画の作成と内容の取扱いには、「地域の人々の暮らし、伝統と文化など地域や学校の特色に応じた課題についての学習活動などを行うこと」と示してある。教育の根幹は、地域に根ざした子どもたちである。地域の環境や民話、歴史など学校を取り巻く地域の文化を多面的に学ぶことが、児童の豊かな発想をはぐくむ入口であると考えられる。総合的な学習を誰もが進んで探究的に学習するために、児童一人一人の特性に合わせた教材を提供する必要がある。そこで、地域のよさを再発見するために、タブレットPC、電子黒板を効果的に活用することを通して、郷土に夢を抱く心情を育てるふるさと学習を実践したいと考えた。本論文は、①児童が興味をもつような教材作成、②個に応じた探究的学習をするためのタブレットPC、電子黒板の活用、③児童が興味のあることを題材にした単元指導計画の3点を重点に実践、検証したものである。

<キーワード> 教育用メディア端末、遠隔交流学習、地域たんけん、タブレットPC

1. はじめに

変化の激しい社会に対応するため、「生きる力」が求められている今日、総合的な学習の時間において、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てることを目標としている。新学習指導要領では、地域の人々の暮らし、伝統と文化など地域や学校の特色に応じた課題を、児童が地域における自己の生き方とのかかわりで考え、よりよい解決に向けて地域社会で誇りと愛着を抱いて行動していくことが望まれている。

しかし、平成22年度に岐阜女子大学が飛騨一之宮地域について今後この地域の文化を継承すると予想される高山市立宮中学校の生徒(68名)を対象にアンケートを実施したところ、次のような結果が見られた。

「将来、絶対にこの地域に住みたい」と感じた生徒は、学年が上がるごとに減少し、3年生では、この地域住みたいと回答している生徒が一人もいないという現実が分かった。多くの生

徒が、一之宮町の自然や伝統文化を守ることが大切であると感じているが、3年生の時点では、63.2%の生徒は、一之宮町に将来、住む魅力を感じていない。

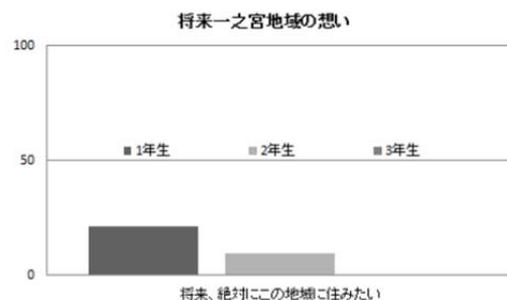


図1 将来の一之宮地域への思い

また、平成24年度に高山市立宮小学校の3年生以上の児童(109名)に、一之宮地域の伝統文化や自然の周知度についてアンケートを実施した。その結果、「がりゅう桜」「位山」など学校生活でも関わることの多いものについては認知度が高かったが、宮川の支流である「ツメタ谷」「ヌクイ谷」や6年生で遠足に行く「大イチイ」などですら、知っている児童が少なかった。

このことから、子どもたちが一之宮町に住む魅力を感じていない原因の一つとして、児童・生徒らが一之宮地域の一部分しか知らないことが挙げられるのではないかと考えた。地域に根ざした子どもたちこそが、教育の根幹である。地域の環境や民話、歴史など学校を取り巻く地域の文化を多面的に学ぶことが、児童の豊かな発想をはぐくむ入口であると考えた。

また、地域の学習教材が今後必要となってくる中で、子ども一人一人の価値観が違うのだから、子どもが多様な価値観で地域を学習するためにも、個々に合わせた教材を提供する必要がある。様々な考えを認め合う中で、地域を再発見できるのではないかと考えた。

宮小学校の教育目標は、「進んでやりぬく宮小の子」である。児童がふるさとである一之宮町について知りたいという願いをもって進んで探求的に学びぬく力をつけ、郷土に夢を抱き、誇りをもってほしいと考えた。

そこで、児童がふるさと学習に興味・関心をもち、主体的な探究活動を行う手段として、一之宮町を教材にしたICTを活用することで、郷土に夢を抱く心情を育て、児童の豊かな発想をはぐくむことにつながるのではないかと考え、本主題を設定した。

2. 研究仮説

- (1) 児童が興味をもつような教材を作成することによって、地域のよさを再発見する関心・意欲が高まるだろう。
- (2) タブレットPC、電子黒板を効果的に活用することによって、主体的に個に応じた探究的学習ができるだろう。
- (3) 児童にとって興味のあることを題材にした単元指導計画を作成することによって、郷土に夢を抱く心情が高まるだろう。

3. 研究内容

- (1) 児童が興味をもつような教材作成の工夫
 - ① 静止画・動画の収集
 - ② 一之宮町の副読本の作成
 - ③ デジタル教材の作成
- (2) 個に応じた探究的学習ができるための工

夫

① タブレットPCに取り入れる内容の工夫

② 電子黒板を効果的に活用するための工夫

(3) 児童にとって興味のあることを題材にした単元指導計画の作成と授業実践の工夫

① 一之宮町を題材にした単元指導計画の作成

② 授業実践

③ 児童のまとめ

4. 研究実践

(1) 児童が興味をもつような教材作成の工夫

① 静止画・動画の収集

平成21年度から、岐阜女子大学の協力を得て、一之宮地域の静止画・動画の収集を始めた。

ア. 静止画の撮影

静止画は、様々な視点から同じ事象を何枚か撮影した。児童一人一人が興味・関心のあることは異なり、感じることも違うと考えたからである。教材作成の際に不足した静止画は、再度撮影したり、高山市役所や宮小学校が保管していたデータを取り入れたりして、教材化した。

イ. 動画の撮影

一之宮地域の人々の協力を得て、一之宮町について語っていただいたことや、一之宮町の伝統文化などの動画を収録した。教材の中に地域の人々の語りや動作があることによって学習への関心・意欲がより一層高まると考えたからである。また、伝統文化を撮影する際は、様々な角度から対象物を見ることができるよう、単視点ではなく4方向からの多視点で撮影した。

ウ. 児童の姿の変容

授業時間以外にも、児童は進んで静止画や動画を見る回数が多くなった。「ここ知っているよ」とか、「これ、〇〇ちゃんのお父さんだ」というように、自分たちが知っている場所や知っている人が教材になっていることが興味をもち関心を高めるきっかけの一つになったと考えられる。

② 一之宮町の副読本の作成

ア. 目次の工夫

高山市教育委員会、岐阜女子大学と連携して、一之宮町の副読本「飛騨一之宮ものがたり」を作成することにした。地域によってはぐくまれてきた文化は異なるので、一之宮町ならではの目次を作成することにした。また、児童に印象付けるような目次になるように、意図的に目次の順序を考えた。目次は次の通りである。

「飛騨一之宮ものがたり」	
1.	わたしたちの飛騨一之宮
2.	水
3.	木
4.	道
5.	祈り
6.	暮らし

「水」が流れ、「木」が育ち、そこに「道」ができる。人々が神に「祈り」を捧げ、人々の「暮らし」が豊かになる。そこに、今日までに先人達が築きあげた文化がある。このように、「飛騨一之宮ものがたり」の目次が児童の心に残るものになるよう工夫した。

イ. 内容の工夫

「飛騨一之宮ものがたり」は、既存の「宮村史」と「飛騨の宮村」を児童・生徒らに分かる言葉に書き直したものである。さらに、一之宮町の子どもたちに一之宮町の財産を知ってほしいという願いをこめて、子どもたちに向けたメッセージを含んだ内容の副読本にした。

また、副読本の中に一之宮地域のクイズを入れることで、子どもたちが楽しく意欲的に学習できるように工夫した。



図2 飛騨一之宮ものがたり

ウ. 児童の姿の変容

これまでの教科書や副読本とは異なった目

次で構成された副読本「飛騨一之宮ものがたり」は、一之宮町の児童にとって、好奇心をかきたてられるものとなった。普段から自然と触れ合う機会が多い児童らにとって、「水」「木」などは、特に見てみたいと思うような目次で、多くの児童が興味をもっていた。

③ デジタル教材の作成

ふるさとを誇りに思う心をはぐくむためには、現在住んでいるところを見つめることが大切である。だからこそ、郷土の本を読むということはたいへん価値あることである。しかし、既存の郷土の本は「宮村史」や「飛騨の宮村」といった、児童らにとってかなり難しい内容の本である。そのため、なかなか手にとって読むことができない。そこで、一之宮町のデジタル教材を作成することにした。

岐阜女子大学によって、副読本の内容をタブレットPCに取り入れたデジタル教材が作成された。静止画や動画を何枚も取り入れて、多面的に資料を見ることができるようになっている。

また、仲間学びの時間には、全員で資料を共有して学習することができるように、タブレットPCと電子黒板をつないで、資料を電子黒板に提示した。



図3 電子黒板の活用の様子

授業で、一之宮町の学習をする際、タブレットPCや電子黒板を使ってみてみたいかという事前アンケートをおこなったところ、79%の児童が「使ってみてみたい」と回答した。デジタル教材は児童にとって魅力的な教材であり、地域のもの・人を教材に取り入れることや、目次を地域に合わせたものに工夫することは、児童が興

味をもつという点で効果的であったと考えられる。

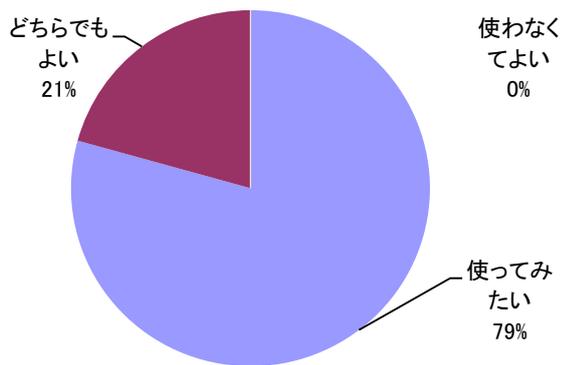


図4 タブレットPCや電子黒板を使ってみたいか？

(2) 個に応じた探究的学習ができるための工夫

① タブレットPCを効果的に活用するための工夫

ア. 資料の工夫

絵や写真を見て考えることが得意な子、文章から読み取ることが得意な子など、児童一人ひとりの価値観や理解できるものは様々である。

そこで、タブレットPCを活用することにした。電子機器を活用することは、児童が興味を抱くきっかけになりやすい。しかし、それはあくまできっかけであって、真の目的は個別化への対応である。誰もが進んで探究的に学習をするために、資料に静止画・動画・文章を取り入れて、児童一人ひとりの特性に合わせて考えられるようにすることである。タブレットPCを活用することで、児童は多くの資料の中から、自分が興味をもったことをどんどん探究していくことができた。授業をしてみて、静止画から見つける子、文章から見つける子など様々であった。



図5 タブレットPCを活用している様子
一人学びの時間、どの児童も課題について意欲的に考え、積極的に調べ、分からないことは進んで質問することができた。



図6 授業の様子

イ. 授業で効果的に活用するための工夫

タブレットPCが普及し始めたのはここ数年のことである。家庭にタブレットPCを所有している児童はごくわずかであり、ほとんどの児童はタブレットPCに触れたことがない。

そこで、授業を行う1週間前から自由に児童がタブレットPCを操作できる時間を確保した。活用できる時間は業間と昼休みの休み時間とし、基本的な約束に従って活用した。児童らは、タブレットPCの内容に興味をもち、休み時間に進んで活用していた。デジタル教材の「飛騨一之宮ものがたり」も進んで見る児童も多く、授業の第1時に入るときには、基本的な操作は習得した上で、学習に集中して取り組むことができた。

② 電子黒板を効果的に活用するための工夫

今回の授業では、電子黒板を黒板として活用するのではなく、資料提示の道具として活用した。通常の黒板には、授業の最初から最後まで課題や児童の考えを残しておいた。このように、黒板と電子黒板を使い分けることによって、児童が安心感をもって授業を進めることができると考えたからである。

そして、タブレットPCは電子黒板と接続して活用した。タブレットPCの資料を電子黒板を通して全員が共有することができた。その結果、児童の発表に説得力が増し、聞いている児童もより集中することができた。また、電子黒

板の画面は非常に大きいため、より分かりやすく見やすい資料提示をすることができた。さらに、今回の授業では、パワーポイントのソフトを活用したことで、画面にタッチをすれば次の資料を提示することができ、テンポよく授業を進めることができた。

仲間学びの時間には、一人学びの時間にタブレットPCを活用して探究的に学習したことを、電子黒板を活用して発表し合い、多様な考えを認め合うことができた。

事後アンケートで、タブレットPCや電子黒板を使ってみて、どう思いましたかという質問に対し、72%の児童が「いつもの授業より楽しい・分かりやすい」と回答した。このことから、様々な資料があるタブレットPCで学習することによって、個に応じた探究的学習が可能となり、その結果、児童に学んだり調べたりする意欲を高めていることが分かった。

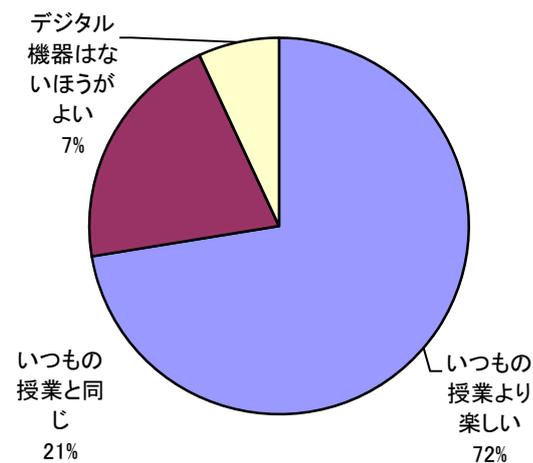


図7 タブレットPCや電子黒板を使ってみて、どう思いましたかという質問

(3) 児童にとって興味のあることを題材にした単元指導計画の作成と授業実践の工夫

① 一之宮町を題材にした単元指導計画の作成 ア. 児童の興味を知るためのアンケート

総合的な学習の時間においては、児童が興味・関心をもったことを主体的に探究することが求められていることから、児童の一之宮地域に対する思いについて4年生29名（男子18名、女子11名）にアンケートを行った。

「一之宮町が好きですか」という質問に対し、

「好き」と回答した児童は80%で、ほとんどの児童が一之宮地域に愛着を感じている。

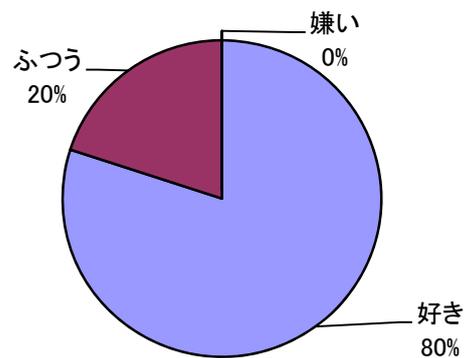


図8 「一之宮町が好きですか」という質問

「一之宮町の好きなところはなんですか」という質問に対しては、「川」と回答した児童が23名、次いで「位山」、「がりゅう桜」という結果であった。このことから、宮小学校4年生の児童が興味をもっているものが「川」であることがわかった。

一之宮町に流れている大きな川といえば「宮川」である。宮川に対して児童らは、「水がきれい」「魚などの生き物がいる」という大きな2つのイメージを抱いていた。

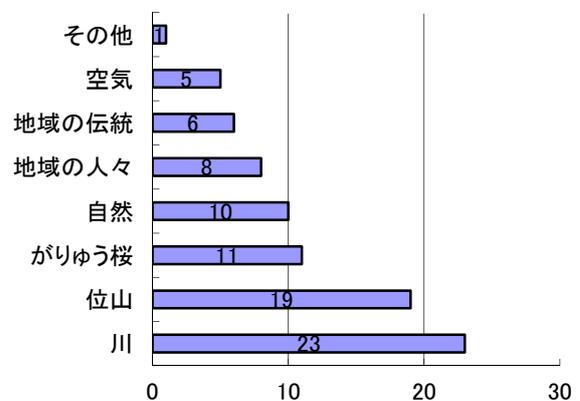


図9 「一之宮町の好きなところはなんですか」

さらに、「宮川は、わたしたちの生活にどんなことで役立っていると思いますか」という質問に対して、社会で学習した「飲み水」という役割の他に、「水遊び」「魚釣り」「暑いときにつかる」などといった生活を豊かにする役割があると感じている児童が多いことが分かった。

以上より、児童が興味のあることは「川」であり、川に対する児童のイメージは恵与的なものであるということが分かった。このことから、

「飛騨一之宮ものがたり」の中でも「水」の項目を取り上げて、一之宮地域を再発見しようと考えた。

イ. ねらいの設定

宮小学校の総合的な学習では、4年生は「福祉」、5年生は「源流から河口まで」を学習する。そのため、本学習を、5年生の前段階の事前学習として位置づけた。5年生で、「川」というものを理解するのならば、4年生の段階では、「川」を感じとることをねらいにしようと考えた。

また、アンケートより、児童が宮川に対して抱いているイメージが「きれい」「生き物がいる」という恵与的なものであることが分かった。しかし、川には恵与的側面の他に、阻害的側面もある。さらに、「きれい」「生き物がいる」の他にも恵与的側面がたくさんある。

このことから、川とは何かということを多面的に考えていく中で、一之宮町の生活や文化につながっていることに気づき、宮川に夢を抱いてほしいという願いをこめて、単元のねらいを次のように設定した。

単元のねらい

自分たちの生活に深くかかわるふるさとの宮川を多面的に見つめることを通して、川の様々な様子を感じとり、宮川に夢を抱いていこうとする心情を育てる。

ウ. 単元指導計画の作成

一之宮町のよさをもっと知ってほしいという願いを込めて、単元名を「一之宮町のよさを再発見しよう」とした。本単元は全3時間で単元指導計画を作成した。

第1時で、一之宮町の知らなかったことや「やっぱり素敵だな」と思うよさを見つけ、第2時で児童が興味をもっている「川」を焦点化して調べていくことにした。さらに、第3時では第2時まで学んだこと、発見したことをもとに、今後自分たちにできることを考えることにした。

② 授業実践

この単元は全3時間の構成で行った。そのうちの第2時を一般公開した。この第2時の授業

実践は以下の通りである。

ア. 本時の流れ

第2時では、学習内容を「川」に焦点化し、学習することにした。

柳田國男は、「風景観賞の手ほどきといふやうなものももし入用ならば、日本では何としても川からまづ学んで行かなければならなかった」と述べている。なぜならば、「川は我邦の地貌を今日あらしむる上に、何事よりも多く參與して居る。即ち天然の最も日本的なるものであった」からであるとしている。このことから、川を学ぶことはふるさとを知ることに強くつながると考えた。

高山市元教育長である森瀬一幸氏は、川には恵与的側面と阻害的側面があると述べている。

恵与的側面とは、①水の供給（農業用水、生活用水、飲料水）、②流通性、③河川魚の資源、④親水空間としての川、である。

阻害的側面とは、①河川の氾濫、②川の遮断性、である。この阻害的側面の対応として、人々は土木的対応の他に、信仰的対応を行ってきた。

4年生の児童らにアンケート調査を行った結果から、川に対するイメージは、恵与的側面の①飲料水としての水の供給と、③河川魚の資源の2点であった。児童が川をより多面的に感じとるために、この2点以外の役割にも目を向けさせたいと考え、第2時のねらいを以下のように設定した。

本時のねらい

タブレットPCを使って源流から河口までの宮川の姿を調べることを通して、宮川の多面的な姿とその力を感じとることができる。

このねらいをもとに、第2時の展開を考えた。

イ. 学習プリントの工夫

本単元は、学習プリントを活用して学習した。

学習プリントには、「発見したページ」「発見したこと」「思ったこと・考えたこと」の3つの欄を設けた。ねらいが「感じとること」であるため、「思ったこと・考えたこと」の欄を大きくして、どんなことを考えたのかが明らかになるように工夫した。「思ったこと・考えたこと」には、「へえ」「すごい」「えっ」「やっぱり」

などと感じたことを書くように指導した。また、宮小学校では理由をつけて話すこと・考えることに力を入れているため、なぜそう考えたのかが分かる理由も書くことができるように指導した。その結果、「思ったこと・考えたこと」の欄に自分の思いをたくさん記入することができた。欄を大きくしたこと、感じた気づき言葉を提示することは有効であったと考える。

いろいろな宮川の姿		思ったこと・考えたこと	
ページ 発見・文 19ページ	発見した宮川の姿 母なる川	思ったこと・考えたこと 宮川はあらゆる命を溜め上げた母なる川に書いてあって母なる川なんてもっと多くてぼくたちは知らない川がある所に住んでいる人たちがいました。	
ページ 発見・文 21ページ	発見した宮川の姿 伏流水	思ったこと・考えたこと あま月間だけ地上を流れる水が地上にもくって川が止まったように見えることを伏流水と言ったことが分かってそう言自然現象を見て見ました。	

図10 「思ったこと・考えたこと」

ウ. 授業内容

本単元は、タブレットPCと電子黒板を使って行う授業であったため、TTで授業を行った。T2の坂田浩一教諭（教務主任）は、主に電子黒板の操作を担当した。



図11 授業の様子

本時の導入では、4年生が一之宮町の中で「川」が一番好きだという結果を電子黒板に提示し、「川」に対する思いを共有し、「川」への意識づけをした。本時のねらいが、川の多面的な姿を感じとることであることから、「へえ」「なるほど」という、知らなかったことだけではなく、既知のことでも「やっぱり」と思ったことや「すごいな」と思ったことも川の姿の発見であるとし、感じたことをたくさん見つけることを課題とした。

一人学びの時間に、児童らはタブレットPCを活用して課題探究を行った。課題探究をする上で、ポイントにするとよいことを次の3点とした。

- ①目次で気になる資料を探す
 - ②気になる資料を拡大する
 - ③自分の印象と違う宮川の姿にも注目す

この3点を参考に、児童らはまず目次から自分が興味をもったところを見つけ、そのことについて探究していった。第1時で既に「水」のことを調べていた児童もいたが、本時ではさらに詳しく調べることができた。静止画を見る児童、動画を見る児童、文章を読む児童など、個々に調べる資料は異なったが、だからこそ様々な資料を収録しておいた効果があったと考える。さらに、きれいな水にしか育たない「梅花藻」などの恵与的側面に目を向ける児童もいれば、水害・公害などの阻害的側面に目を向ける児童もいた。



図12 電子黒板を活用している様子

自分の考えを足場として、仲間学び（全体交流）を行った。「水」の中にも資料がたくさんあるため、一人一人の発言が他の児童の新たな発見となった。特に、恵与的側面に着目した児童が多かったため、阻害的側面に着目した児童の発言を聞いて衝撃を受けていた。

全体交流の後、学習のまとめとして川に対して改めて強く感じたことを記入させ、感想を交流し合った。最後に教師の話で宮川が昔から大切にされてきたことについて2つの事例を挙げて話をした。一つ目は、深い川にもぐって川を下から見ると、水面が鏡のようになって、自分の顔が映るくらいきれいだったという話で



図13 水無神社の写真の提示

ある。児童らは、とても目を丸くして驚いていた。二つ目に、今から約150年前に富田礼彦（いやひこ）が描いた水無神社の絵を提示した。神官が本殿に背を向け、逆方向の常泉寺川に向かって祝詞をあげている絵である。このことから、川は昔から大切にされているということが分かる。

この絵を見て、児童は「神社に川が近いよ」「宮川には神様がいるんだ」「神様がいるから神通川という名前になるんだ」「だから昔から大切にされてきた」などといった感想を發表した。ここで、児童の口から「神」という言葉が出たのは、「飛騨一之宮ものがたり」に「神が宿る」「シンボル」などの言葉がメッセージとして書かれていたからだと考える。また、児童が一番興味をもっていた「川」を題材にすることで、学習意欲が高められたと考える。

③ 児童のまとめ

児童のまとめには、全3時間とも「知らなかった」「分かった」という発見の感想があった。また、全3時間とも「大切にしたい」「守りたい」といった「～したい」という意欲ある感想を書いていた。第1時では28.6%、第2時では27.6%の児童が、第3時においては児童全員が「～したい」とまとめている。自分たちのふるさと一之宮町に尽くしたいという思いが伝わってくる。

	知らなかった・分かった			大切にしたい 守りたい		
	出席	人数	%	出席	人数	%
第1時	28	28	100	28	8	28.6
第2時	29	29	100	29	8	27.6
第3時	28	13	46.4	28	28	100

図14 児童の意識の変化

第1時は、一之宮町を再発見した驚きや喜びを感じている児童が多かった。

第1時のまとめ

- ・ ぼくは、一之宮町について自分はいろいろ知っていると**思っていたけど、知らないことがたくさんあってびっくりしました。**
- ・ わたしは、魚（あじめ）が宮川をしずかにしてくれたということが分かりました。新しいことが**分かったり、発見できたりして楽しかった**です。
- ・ **タブレットPCや本で、今まで自分が知っている以上のことがたくさん分かりました。**これからはもっと一之宮町の自然を大切にしたいです。
- ・ 「くらし」には昔の生活のこと、「祈り」に水無神社のれき史が書いてあって、いろいろなことがのっていて楽しかったです。**もっとたくさん調べたい**と思いました。

図15 第1時のまとめ

第2時のまとめ

- ・ 宮川はきれいだけど、ずっと下流の**神通川で病気が起きていた**ことが分かりました。宮川は飛騨ちいきの母なる川だから、**きれいにしたい**です。
- ・ 宮川はきれいで、カワゲラや梅花もがいてとても**いい川だ**と思いました。でも、神通川になると**イタイタイ病で死んでしまうこと**もあってびっくりしました。
- ・ ぼくは、Aくんの發表したイタイタイ病で死んだ人がいるという話を聞いて、**川にもこわいところがあるんだ**なと思いました。
- ・ 川はいいところだけでなく**悪いところ**もあることが分かりました。ちいきの人が守ってくれた**宮川を今度はぼくが守りたい**です。

図16 第2時のまとめ

「知っていると思っていたけど、こんなことも

あるんだ」という発見が児童の心に残っていた。また、もっと調べたいという次時への意欲がある児童も多かった。

第2時では、全体交流を通して、川を恵与的側面と阻害的側面から多面的に見つめることができた。川の美しさと恐ろしさを知った上で、守っていききたいと願う児童の感想や発言があった。

第3時のまとめ

- ・ 昔の人が物を作って残しているのなら、**ぼくも昔の人のように何かを残したい**です。
- ・ 川の水や松などが一之宮で育っていたり、使われていたりするので、**そういうものを大切にしたい**です。
- ・ 宮川やがりゅう桜を大切にしたいです。わけは、**宮川はきれいだからこれからも守っていき**たいし、がりゅう桜は毎年きれいな桜をさかせてもらいたいからです。
- ・ **ぼくは、きれいな川を守るために、川のごみを拾ったり、そうじをしたり**したいです。

図17 第3時のまとめ

第3時では、今後自分が一之宮町にできることはないかと考える児童が多く、全員が「～したい」という一之宮町と自分をつなげる感想を書いていた。

さらに、第1時から第3時において、次のような児童のまとめの変容があった。

第1時では、一之宮町のよさをもっと探したいという「進んで」学ぼうとする探求心が見られる。第2時は、きれいだと思っていた川はいいところだけでなく恐ろしいところもあることを認めた上で、A児は宮川を守りたいと語っている。第3時では、A児はこれまで「大切にしたい」という気持ちから、「教えたい」という気持ちに変化している。自分が情報の発信源となって、自分が一之宮町のためにできることを進んで考えやりぬこうとしている。B児は「やっぱりいいところ」と一之宮町のよさを再確認した上で、「守っていききたい」という自分にできることを自分なりに考えている。「将来一之宮町に住みたい」理由が一之宮町のくらし

を守りたいからという明確なものとなった。

児童のまとめの変容

《A児》

第1時 一之宮町にはまだ知らないことがあるので、**どんどん探して一之宮町を大切に**していきたいです。

第2時 ぼくは、宮川が**あばれたり神通川でイタイタイ病**が起きたりしたことがあるけど、宮川はきれいで生き物がたくさん住んでいるから大切にしたいです。

第3時 ぼくは、タブレットPCを使って学習して一之宮町にはいろいろなよさがあることが分かったので、今度は他の人にも一之宮町のよさを教えていきたいです。

《B児》

第1時 最初はいいところをあまり知らなかったけど、川のことでは「**あじめ**」、道のことでは「**位山古道が平安時代からある**」、木のことは、「**がりゅう桜や大イチイは千年以上**生きている」ということが分かってびっくりしました。自分でも、もっと探したいです。

第2時 宮川は、ふつうは川遊びなどができるとてもいいところだけど、台風がくると大変になると分かって、いい川だけど少しこわいところもあることがみんなの意見を聞いて分かりました。

第3時 一之宮町は、やっぱりとてもいいところだなと思いました。わけは、川はとてもきれいで便利だし、とてもいい木もあるから、そんな一之宮町のくらしを守っていきたいです。だから将来一之宮町に住みたいです。

図18 児童のまとめの変容

第3時のまとめで、児童らが「～したい」と自分にできることを考えられたのは、ふるさと一之宮町の川を様々な角度から多面的に見つめなおしたことで、一之宮町を新たに発見し、より慕う心が芽生え、将来の一之宮町に夢を抱いたからであると考えられる。そのため、第2時から児童が興味をもっていた「川」に焦点化し学習

を進めたことは効果的であったと考える。児童の地域のために進んで「～したい」と考える気持ちをも今後大切にしていきたい。

5. 研究のまとめ

① 子どもの変容

実践前に行ったアンケートでは、一之宮町について説明できる事象は少なかった。今回の実践では「川」を取り上げたが、水に関することで実践前に多くの児童が「全く知らない」と回答した事象は次の6つであった。

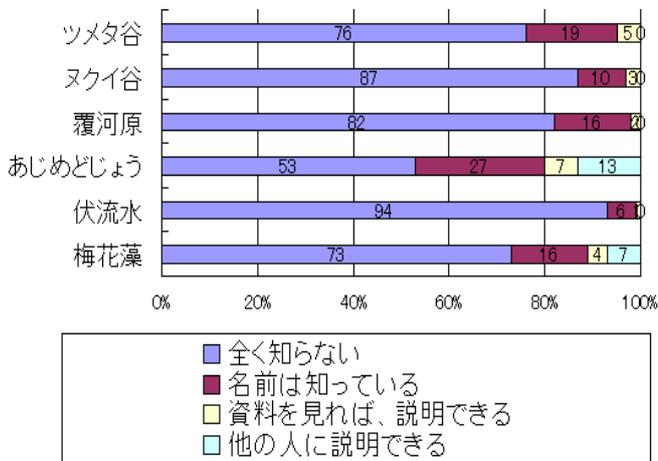


図19 子どもの変容

今回の単元で、タブレットPCと副読本を活用して学習した結果、この6つの事象の中で児童らがもっとも興味をもったのはあじめどじょうと伏流水であった。

事前アンケートでは、80%以上の児童が説明できなかった6つの事象だが、事後の感想文には、以下のようなことが書かれていた。

個々の児童によって興味をもったことや心に残ったことは異なるが、この6つの事象について全体交流をするなかで児童の理解度は確かに高まった。

② 研究内容の有効性と課題

A. 研究内容1：児童が興味をもつような教材の工夫

児童が教材に興味をもつために、① 静止画・動画の収集、②一之宮町の副読本の作成、③デジタル教材の作成を行った。データの中に数多くの静止画を取り入れることで、「もっと探したい」という児童の要求に応じることがで

きた。さらに、今までになかった副読本を作成することで、自分の身近な場所や人が教材になることに親しみや探求心が生まれた。そして、もっとも有効であったのが、副読本をデジタル教材化したことである。もともとICTが好きな児童らであったため、タブレットPCに興味・関心をもち、休み時間も進んで教材を見ていた。以上より、「児童が興味をもつような教材を作成することによって、地域のよさを再発見する関心・意欲が高まるだろう」という研究仮説1を達成するための研究内容1は有効であったと考えられる。

しかし、副読本やデジタル教材の表現は、中学生向きに作成した文面なので、小学校4年生にとって内容を理解するにはやや難しいところがあった。今後、小学生対象に副読本を活用するのならば、教師が十分に説明することや、漢字にるびをふるなどの工夫が必要である。

- ・ツメタ谷とヌクイ谷が合わさって学校の裏の川になっていることが分かりました。
- ・宮川が地下を通っていることが分かりました。その場所を覆河原といいます。
- ・宮川にはあじめという生き物がいて、あじめは神様の仰せを守ったからすごいと思いました。
- ・梅花藻が咲くほど常泉寺川は、きれいなんだなと思いました。
- ・ツメタ谷の水は冷たくて、ヌクイ谷の水は温かい水ということが分かったので、ぼくもさわってみたいです。
- ・8月中旬から秋にかけて川の水が地下に潜る自然現象が起こることがわかって、とても不思議だと思いました。(伏流水)

図20 言葉での変容

I. 研究内容2：個に応じた探究的学習をするための工夫

個に応じた探究的学習をするために、①タブレットPCに収録する内容の工夫、②電子黒板を効果的に活用するための工夫を行った。タブレットPCには、静止画・動画・文章を取り入れたことで、各自が興味をもったところや調べやすいところから、進んで探究的に学習することができた。静止画から見つける子、動画の

音声から見つける子、文章から見つける子など様々であり、児童らは意欲的に、また主体的に学習していた。数多くの様々な資料を収録したことは、個に応じた探求的学習をする上で有効であった。また、資料提示のために電子黒板を活用したことで、個人で発見したことを全員で見て共有することができた。

以上より、「タブレットPC、電子黒板を効果的に活用することによって、主体的に個に応じた探究的学習ができるだろう」という研究仮説2を達成するための研究内容2は有効であったと考えられる。

ウ. 研究内容3：児童にとって興味のあることを題材にした単元指導計画と授業実践の工夫

単元指導計画と授業内容を工夫するために、①一之宮町を題材にした単元指導計画の作成、②授業実践、を行った。児童が一之宮町の中で一番興味をもっていた「川」を題材にして授業を行った。本単元では、多面的に一之宮町（主に宮川）を学習した。事前アンケートで、「将来一之宮町に住みたいですか」という問いに対して、「住みたい」と回答した児童は、11人で全体の40%だった。全3時間を終えての③児童のまとめには、「大切にしたい」「守りたい」という自己と一之宮町をつなげた感想を全員が抱いていた。

以上より、「児童にとって興味のあることを題材にした単元指導計画を作成することによって、郷土に夢を抱く心情が高まるだろう」という研究仮説3を達成するための研究内容3は有効であったと考えられる。

本単元をより効率的に進めるために、教師も児童も機器に十分に慣れておく必要があると感じた。

5. おわりに

今回の授業を実践するにあたって、一之宮町という地域について、また、宮川という川について真剣に向き合って調査をした。教材と真剣に向き合うことは、子どもと真剣に向き合うことに、地域を理解することは、そこに住む子どもを理解することにつながるということを改

めて強く感じた。また、宮川を「神のいる川」「大切にしたい川」と捉えた児童らの想いに感動した。本実践を通して、児童の一之宮地域に対する愛着や思い入れが強く深くなったことをこの上なく嬉しく思う。

〈参考文献〉

- 1) 新学習指導要領「総合的な学習の時間」
- 2) 新学習指導要領解説「総合的な学習の時間」
- 3) 文化情報のデジタル・アーカイブの実践的研究【3】
— 「飛騨一之宮地域」における地域文化の記録からの考察 — 松井久美子／久世均／齋藤陽子／東田治／森瀬一幸
- 4) 筑摩書房 柳田國男全集 2 / 柳田 國男 著